

令和6年度第2回米子市総合教育会議 議事概要

■日時

令和7年3月12日（水）午後3時から午後4時35分

■場所

米子市役所本庁舎5階 議会第2会議室

■議事

- (1) グローバル社会に対応できるこどもの育成（外国語教育の推進）
- (2) インクルーシブ教育の現状と推進について
- (3) こども総本部3年間の成果と課題、今後について

■出席者

市長 伊木 隆司

教育長 浦林 実

教育委員 白井 靖二

教育委員 荒川 陽子

教育委員 塩地 淳子

教育委員 永井 善郎

■出席職員

総合政策部長 佐々木 俊二

総合政策部総合政策課長 中本 教聖

総合政策部総合政策課総合戦略室長 松本 謙次

総合政策部総合政策課総合戦略室主任 藤原 朋也

こども総本部長 瀬尻 慎二

教育委員会事務局長 長谷川 和秀

こども政策課長 永榮 一博

こども政策課課長補佐 長門 美香

こども政策課担当課長補佐 國谷 建太

こども政策課担当課長補佐 佐藤 祐佳

こども相談課長 松竹 直樹

こども相談課担当課長補佐 圓山 智也

教育委員会事務局次長兼こども施設課長 矢野 伴典

こども支援課長 長尾 理恵

学校教育課長 仲倉 昭雄

学校教育課課長補佐 波多野 健司

学校教育課担当課長補佐 木村 和仁

学校教育課担当課長補佐 門脇 康裕
教育委員会事務局次長兼生涯学習課長 毛利 公一
学校給食課長 伊藤 康恵
文化振興課長 大塚 一平
スポーツ推進課長 成田 博顕

■傍聴者数

0人

【議事概要】

■議事（１） グローバル社会に対応できるこどもの育成（外国語教育の推進）

グローバル社会に対応できるこどもの育成（外国語教育の推進）について、資料 1 に沿って事務局から説明。

【委員意見】

- 外国語教育には、質も量も重要であるが、ALT については質にこだわっていただきたい。米子市の ALT においては、英語学習の中で具体例として出身国の文化や生活習慣について触れ、こどもたちはさまざまな国に思いを馳せながら学習できることは素晴らしい。こどもたちが文法や発音などの苦手意識を持たないよう、英語を楽しく学んでほしい。例えば、実際の海外での挨拶も状況に応じて様々な言い方があり、その場に応じて使い分けられるような思いのこもった学びができるといい。
- 言語はツールであり、聞く、話す、読む、書くの順番で重要であると考え。以前は読む、書くを中心に教育が行われてきたが、これからは聞く、話すことで言葉のシャワーをかけていくべきである。日本では英語に触れる機会が少ないため、学校教育においてそうした機会を作っていく必要があるのではないか。
- Early、つまり低学年からの外国語体験を考えると、ALT の増員も必要だと考える。近年は English Park の取組も充実し、タブレットもうまく活用されているが、韓国、中国の例で実施されているように、学校給食などにも英語を取り入れて、英語に触れる機会を増やすのもいいのではないだろうか。外国語に興味関心を持つことができるきっかけづくりを積極的に進めていただきたい。
- 英語学習への意欲は英語を使う必要性があるかどうかで変わるが、近年では翻訳アプリでコミュニケーションがとれるようになり、英語を使う必要性が薄れている。この課題に対しては、人と人が直接コミュニケーションを取れたときの喜びや楽しさが重要となる。国際便が就航している米子空港も活用し、こどもたちが外国と触れ合い、生の英語を体験するチャンスがあってほしい。

【市長】

- 言語に触れる機会が小学校からなのか中学校からなのかで定着度は異なる。ALT については引き続き質にこだわっていくとともに、学校教育の中で他のカリキュラムとの連携を模索し、できるだけ多くの学習時間を確保する方法や英語との接触機会を増やす方法を研究してほしい。
- 英語はテストのためではなくツールであるという認識が重要であり、実際に英語でコミュニケーションをとる機会があることが求められる。学校以外での学習機会の提供も大切な視点であり、国際便の就航する米子空港の活用についてみなさまからご意見をいただきながら、中国語や韓国語といった英語以外の言語も含めて、こどもたちが

外国語に触れられる環境を考えていきたい。

【教育長】

- コミュニケーションを取れるようになることがどの言語においても重要である。昨年度は韓国の東草市とオンラインで交流した。英語に限らず、国際交流の機会を促進していきたい。
- 質については、現在の委託事業者は質が高く、他の事業者であれば量は多くなるが、引き続き質にこだわりたい。なお、English Park という取組において、7 人の ALT が 1 つの学校に集まることで、いつもとは異なる ALT からいつもとは異なる方法で教えていただいているなど、市独自の取組を進めている。
- 量については、国の事業であるタブレットと AI を活用した学習支援事業に手を上げており、採択されれば、子ども 1 人ひとりが質の高いフィードバックを得ることができ、良い効果が生まれるのではないかと考えている。

■議事（2）インクルーシブ教育の現状と推進について

インクルーシブ教育の現状と推進について、事務局から資料 2、3、4、5 に沿って説明。

【委員意見】

- 日頃より各学校において特別支援教育への取組が積極的に行われている。
- 障がいのある子どもとの生活から学ぶことは多い。例えば、教員時代に、相手の口を読んで会話をする難聴の子どもから、板書をしながら黒板に向かって説明しては相手に伝わらないことを学んだ。それは相手の障がいのあるなしに関わらず大切であることに気づかされた。PTA 時代には、運動会において障がいのある子どもを支え応援する友人たちの姿から、子ども自らがインクルーシブについて学んでいる様子を見た。
- 居住地交流は重要な取組である。特別支援学校に通う子どもが居住する地域で将来も生活していく際には、その地域でも友人を持ちたいという思いもあるはずである。その地域で出会ったときに声をかけあえる関係性が大切であり、切れ目のない関係が築かれてほしい。
- 全国に先立って導入された就将小学校の OriHime は、学校の子どもたちが学校に通うことのできない院内学級の子どもの存在を感じられ、また、院内学級の子どもにとっても OriHime が授業に参加する励みとなり、授業参加に対する意欲が増したと聞いている。障がいのある子どもが自己肯定感を得られるような取組を実施してほしい。
- 入学式・卒業式に参加した際、児童生徒や保護者に向けた手話通訳者がいらっやがたが、子どもたちが生活の中でそうした存在に触れられることは大切である。また、子どもたちだけでなく、教員や地域の人たちが障がいのある方々への接し方を知らないことも多く、大人が障がいのある方々とのコミュニケーションを学べる機会が市報などで設けられるといいとも考える。

【市長】

- インクルーシブ教育の本質は、障がいのある子どもと健常な子どもが同じ空間で学び、共に成長することである。インクルーシブ教育は障がいのある人に焦点があてられるが、健常な子どもが障がいのある子どもと共に生き、学ぶ機会がなにより重要である。そして、成長した子どもたちが将来、他者に手を差し伸べられる社会になってほしい。
- 米子養護学校の児童生徒数が増えていると聞いが、特に小学校、小学部の年代においてはやはり一緒に学ぶべきである。また、特別支援学校と小中学校の交流といったレベルだけでなく、転校が可能であってもいいのではないかと考える。これは県教委に確認や相談をしていただきたい。

【教育長】

- 子どもたちが一緒に過ごすことによさがあると実感している。教員が手の差し伸べ方を教えるよりも、子どもたちが一緒に過ごしていく中で学んでいくものの方が大きい。もちろん、教員の指導もこどもの模範や手本になり、こどもの成長につながるため、指導主事を増やして教員の指導力向上に取り組んでいる。
- 県教委とも連携しながら、できることを増やしていきたい。

■議事（3）子ども総本部3年間の成果と課題、今後について

子ども総本部3年間の成果と課題、今後について、事務局から資料6に沿って説明。

【委員意見】1:20:45

- 子ども総本部がふれあいの里に集約されたことはありがたい。駐車場は広く、安全に乗降することができ、総合案内も対応が丁寧であり、安心して行くことができる。
- オープンスクールはいろいろな可能性があり、活用していただきたい。子どもたちは校内を見学することができ、保護者は通学や学校生活について、直接質問することができる。また、町内会やこども会も連携がとれることを示すことができればよりよいと考える。
- 研修で一緒になった米子市と同規模自治体の教育委員曰く、関係機関の連携が課題となっている。そうした課題感について、米子市子ども総本部の取組は良い事例として紹介できるものであった。
- 二十歳を祝う会の案内にこころの相談の窓口の案内があり、すばらしいと感じた。二十歳を祝う会に來れない方にこそ届いてほしい情報であり、さすがだと感じた。
- 米子市の学校給食にフレイル予防給食が登場し、小中学生のころからフレイルに対する意識を持つ意義、子どもたちが家族に話をする効果があり、良い取り組みだと感じた。
- 課題として、オープンスクール参加の啓発があるが、何度か提案しているが、市報に「ここを見れば学校のことが分かる」ような学校コーナーがあると良い。
- 家庭教育で大切なことについて
 - ・ひとつは家庭内での子どもへの接し方である。こどもの言葉遣いや態度は家庭内での親の接し方の影響を受けるため、家庭内での人との接し方の基礎作りが大切である。琴浦での「10秒の愛」は良い取組だ。
 - ・こどもの身近なお手本は親である。親になる資格試験はないため、親自身が親になるという自覚を持ち、こどもの成長とともに自身も成長することが大切である。その成長の場を地域で作ることができないだろうか。
 - ・いもとようこ著の絵本「しゅくだい」の中で、だっこをするという、学校の「しゅくだい」がある。家族間でだっこをし合うことで、心が満たされて次の日を迎えるという話である。親も忙しいかもしれないが、少し手を止めて愛情を注いでほしい。
 - ・かねてからお伝えしているとおり、こどもの睡眠も大切である。幼少期に睡眠を整えることで、非認知能力の醸成（発達）など、いろいろなことが改善していく。幼少期から支援が可能な子ども総本部の、これからの家庭教育支援の取組を期待している。

【市長】

- 子ども総本部設置は、福祉的課題が学校に押し寄せていることを課題と捉え、これを解消していくために設置した。学校への福祉的課題の対応については一定の成果が出ており、今後はこれを教育の質の向上に結びつ

けていきたい。言い換えれば、教員が本来の教育により時間を割けるようにし、米子市で教員になれば教育に時間を割けますよ、というメッセージを示していきたいと考えている。

- 家庭の問題を各家庭に啓発していくことも大切である。国ではこども家庭庁が設置されたが、その名称のわりに家庭の問題へのフォーカスがあまりないように見受けられる。こども総本部を国に先立ち立ち上げたように、家庭の問題についても米子市では先進的に取り組んでいきたい。

【教育長】

- 組織体制を変えたことにより、職員の心構えも変わってきた。縦割り行政で見られる担当部署不在のため物事が進まないといったことはなく、こども総本部全体としてどうにかしていくというマインドへ変わっている。
- 教育委員会としては、スクールソーシャルワーカーと家庭児童相談室の連携向上に取り組みたい。また、家庭教育を支援していくうえで、こどもの意見を受け止める大切さを米子市の教育に取り入れていきたい。